

いかに大事なのかを語ります。そこから同伴者として永遠にわたしたちと、一緒におられる約束をされています。弟子たちが主イエスを囲むように、主イエスがその中心におられて、語られるような仕方と一緒におられます。

それを一七b節に「あなたが共におり、あなたがたの内にいる」と言われます。内というのは、決して失われぬからです。外からつけたものではなく、もう内に入っていることではないです。

主イエスは「あなたがたをみなしごにはしておかない」と言われます。そのために戻って来られます。迷子であった子どもを親が探し、見つけ出して、安心させるようにわたしたちにもしてくださいなのです。

このように主は人を「みなしごの状態」から救われます。人は住みかを失い、みなしごとなります。失われていくものの中で生きるのが人の姿です。それでいて、みなしごは自分の力で生きねばなりません。自分だけが頼りです。自分を頼りに生きて、それで終わってしまふのです。しかしそれは、神様が望まれる人の姿ではありません。

そこでみなしごのわたしたちに神様が関わってくださったのです。懸命に生きていながら、失われていく空しさ、その空しさからの救いをもたらされたのです。それが分かるのがわたしたちの信仰です。この信仰を一緒にあって支えてくださったのが弁護者である聖霊です。わたしたちは自分だけで信じているのではなく、信じる者には弁護者がついているのです。

二〇節に「かの日には、わたしが父の内におり、あなたがたがわたしの内におり、わた

しもあなたがたの内にいることが、あなたがたに分かる。」と主イエスが言われます。父と子が互いに内におられることは、「あなたがた」が内にいることをもたらしてくださったのです。

父なる神と御子が共にわたしたちを内にいれてくださる。そこに聖霊がいてくださる。内に入れて包みこんでくださることを父、子、聖霊によって実現されるのです。わたしたちはこの三つのお方によって確かに包まれます。わたしたちにとっては、父なる神を知ること、主イエスを知ること、聖霊が分かることもみな、わたしたちが「みなしご」ではないことを知らせるのです。

しかし、これは世の見方や価値観では計れないものです。主イエスははっきりと「世は見ようとも知ろうともしない。」と言われます。この世では見える現実と数値と論理によってしか物事を認められないものです。

ところが、父、子、聖霊なる神は新しい掟によつてこの「道と真理」を実現されると言われています。主イエスは御自分を道であり真理であると言われます。真理と道は神の御心とその方法を示します。それは愛の掟です。一三章三四〜三五節に「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いに愛し合うならば、それによつてあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。」と教えられました。

掟は旧約聖書では契約によつてもたらされたものです。神と人をつなぐものです。預言

者は新しい契約を「人は神の民となり、神はその民の神となる」(エゼキエル書三六章二八節、エレミヤ書三章二二節)と言います。

愛の掟は父と子が結ばれ、子が弟子たちと結ばれた仕方です。この愛は父と子からくるものです。人からのものではありません。この愛は、世のもの、人間的な親しきや結びつきではありません。ペトロの手紙一章八節にあるような神を愛する仕方です。そこには「あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれています。」と教えられています。

人間的な結びつきがむしろ神を見失わせることがあります。わたしたちの交わりは、いつもそこに同伴者、弁護者がおられることを見失ってはなりません。

主イエスは「この霊をわたしたちが「知っている」と言われます。それは、今、わたしたちがこの言葉の前に立っているからです。礼拝は主の言葉の前に立つことです。礼拝に集まり、主イエスがこの霊を「知っている」と言われた声を聞く時、わたしたちには確かに聖霊が働いているのです。それが分かるのです。(五月一九日 ペンテコステ礼拝)

四月講壇一覽

第一主日(四月七日)

公同礼拝

「信じて祈るなら」

高橋和人牧師

申命記 八・一〜一〇

マタイ 二一・一八〜二二